



鳥取大学農学部で生まれた
新品種「瑞秋」

写真 田邊 賢二 (A昭48年卒)



会長あいさつ

農学部同窓会会長

西尾 迢 富

冬の気配が日々刻々と増してきた今日この頃ですが、同窓会会員の皆様方におかれましては、仕事や地域社会等で日々ご活躍のこととお慶び申し上げます。また、平素より、同窓会活動に対しましてご支援、ご協力をいただいておりますことに感謝申し上げます。

さて、私が同窓会会長に選出されてから1年半近くが経過しました。鳥取大学が独立行政法人となつて、農学部を取り巻く環境も厳しくなりつつあります。しかし、そうしたなかで今年度より、菌類きのご遺伝資源研究センター、鳥由来人獣共通感染症疫学研究センターが設置されました。農学部の附属農場と附属演習林も統合、機能強化されて、新たにフィールドサイエンスセンターとして新たな歩みを始めましたことは、今後の農学部の発展に大きく貢献することと確信しております。

さらに、今年8月からは、農学部本館の建物改修工事が始まり、順調にいけばここ数年の間に農学部

の建物内部は大きく変わると聞いております。改修されて新しくなる建物のなかで、従来よりも一層充実した教育、研究が行なわれていきますことを心より願っております。

ところで、近年、同窓会活動が停滞するなか、昨年の総会において、「同窓会のあり方検討委員会」を発足させることとなり、今後の同窓会活動のあり方について鋭意検討していくことになりました。それを受けて、今年の5月14日に第1回委員会を開催し、名簿作成問題等、同窓会活動をいかに進めていくかを議論しました。今後、この委員会の場で議論を深めながら、これからの同窓会活動について方向性を見出していくことにしたいと考えております。

最後となりましたが、同窓会会員の皆様方の今後益々のご活躍とご健勝を祈念申し上げますとともに同窓会活動に対しまして、これまで同様、ご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

主な目次

会長あいさつ	1	講座トピックス	3
農学部長あいさつ	2	支部だより	8
役員会報告	2		



21世紀の新しい農学部を目指して

農学部長 本名 俊正

アメリカ南部には、これまでにない大規模なハリケーンが襲来するようになりました。日本でも雨の降り方が熱帯のスコールのように集中的になり、何となく地球規模での気候変動が始まってきたように思います。同窓会の諸先輩におかれましては、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。常日頃より鳥取大学農学部の発展のために、多大なご支援をいただきましてありがとうございます。心より厚く感謝申し上げます。

鳥取大学も法人化を迎え2年目となりました。自主、自律（自立）、自己責任を基本として、これまでの「大学を運営する」ことから、自ら創意工夫をして「大学を経営する」変革の時代になりました。社会的に「魅力ある大学」になるためには常に改革が必要であり、さらに大学間との競争と少子化を考えますと、数年のうちに大学は大きく変わることを予想されます。

農学部では、4月から大きな学部改組を行ないました。生物資源環境学科においては新しい教育コースと教員組織を改組するとともに、獣医学科でも教員の増員をすすめ、両学科の充実を進めることになりました。さらに、附属施設は、鳥由来人獣共通感染症疫学研究センター、菌類きのこ遺伝資源研究セ

ンター、フィールドサイエンスセンターを新設し、動物病院と合わせて4つになりました。

このように、農学部全体がこれまでの「生産」中心の学問体系から、生産者から消費者までを視野に入れた、「食料」「安全」「健康」「環境」「生命」「エネルギー」等について取り組む「21世紀の新しい農学」への転換を図り、魅力ある「21世紀の新しい農学」へ発展することを目標としています。

また、農学部では新しい時代に対応した施設とするために、本館東半分（図書館側）の改修工事が8月から始まり、来春2月の完成に向けて連日工事が進んでいます。4階までぐるりと足場が組み込まれた大きな布ですっぽりとくるまれた状態です。昭和41年に吉方から湖山の地に移転し、40有余年の歳月が流れました。上水道、下水道はじめ様々な支障を解消するために、内部を全面的に改修し、廊下の付け替え、教員室、実験室、学生居室等々の整備とともに情報化時代に対応した建物の改修と設備の充実を進めています。

同窓生諸先輩のこれまでの暖かいご支援に心から感謝いたしますとともに、今後ともさらなるご支援ご鞭撻を賜りたく、どうぞよろしくお願い申し上げます。皆様方のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

役員会報告

総会開催年の中間年に当たる今年、農学部同窓会役員会が5月14日（土）の午前11時より、鳥取市の鳥取厚生年金会館で、38名の同窓会役員が出席して開催されました。

まず、西尾会長の挨拶の後、本名俊正農学部長が最近の農学部を取巻く状況について話をされました。

つぎに、報告および協議に入りました。

まず、平成16・17年度中間事業報告が学内幹事によって行われ、質疑応答の後、全会一致で承認されました。事業内容は次のとおりです。

- (1) 総会開催（平成16年5月8日）
- (2) 会報第26号の発行（平成16年9月20日）
- (3) 支部総会の開催

山口県支部	(H16・5)	徳島県支部	(H16・10)
兵庫但馬支部	(H16・5)	島根風紋会	(H16・10)
北海道支部	(H16・6)	島根県支部	(H16・11)
石川県支部	(H16・6)	福岡県支部	(H16・12)
熊本県支部	(H16・6)	中国支部	(H16・12)
沖縄県支部	(H16・6)	静岡県支部	(H17・1)
岡山県支部	(H16・8)	滋賀県支部	(H17・1)
香川県支部	(H16・8)	鳥取中部支部	(H17・1)
関東支部	(H16・8)		

(4) クラス会の開催

C 昭和20年卒	V 昭和32年卒
C 昭和32年卒	C 昭和30年卒
V 昭和26年卒	

(5) 卒業祝賀会援助 (平成17年3月18日開催)

(6) 慶弔時の祝電・弔電の発信 (合計12件)

(7) 卒業式への西尾会長出席 (平成17年3月18日)

(8) 入学式への西尾会長出席 (平成17年4月6日)

(9) 終身会費の納入状況

平成17年4月現在 : 1,350件 (12.6%)

平成16年入学生 : 241件 (95.6%)

続いて平成16・17年度中間会計報告が学内幹事からあり、審議の結果、全会一致で承認されました。

役員会は約1時間半で終了し、その後、懇親会へ

と入りました。懇親会では、昭和22年卒の西尾会長から平成2年卒の同窓生まで、幅広い年代の会員が学生時代の思い出話や近況報告等で盛り上がり、午後2時頃に散会しました。

なお、役員会に先立って、午前10時より第1回同窓会のあり方検討委員会が開催されました。この委員会は、近年の同窓会活動に対する関心の低下等の問題を背景として、昨年の総会時に設置が決定したもので、構成メンバーは、各学科・講座から選出された2名ずつの会員と常任幹事です。当日は、同窓会名簿作成の是非や、同窓会活動活性化の方向等について、約1時間程度、議論を交わしました。議論した結果については、来年の総会で報告する予定です。

(能美 誠・B昭55年卒)

講座トピックス

生物資源環境学科では、今年4月の入学生より、教員の所属組織である講座が大きく2つに統合され、また学生の所属する教育コースが大幅に変わりました。しかし、まだ新体制1年目であり、従来の(旧)講座や教育コースを中心に教育研究活動が行われているため、講座・学科だよりは従来通りのスタイルで執筆しています。

生物生産学

平成16年秋から17年秋までの生物生産学講座コース近況をお知らせします。生物生産学講座へ分属を希望した新2年生は定員40名に対して47名あり、毎年のことながら人気講座・コースの一つです。今回お知らせする最大の慶事は、植物病理学研究室教授の尾谷浩先生が大学院連合農学研究科(連合大学院博士課程)の研究科長(部局長)選挙に当選され、4月1日付で就任され、連合大学院の運営と研究業績向上に尽力しておられます。

また植物遺伝育種学研究室教授辻本寿先生は本名学部長の指名で副学部長に就任され、お二人が学部および全学の中核的職務にあたっておられ、当講座として心強い限りです。

作物生産学研究室では田中朋之助手が10月1日付

で助教授に昇任され益々研究に磨きがかかっています。植物遺伝育種学研究室田中裕之助手は9月に在来コムギの製パン性に関する研究が実を結び、博士(農学)の学位を取得されました。

園芸学研究室では助教授の板井章浩先生がナシ果実の成熟関連遺伝子の解析で成果を上げ、平成18年度の学会賞奨励賞に内定しています。

植物病学研究室では助教授の児玉基一朗先生が助教授ながら大学院博士課程の主旨導教官(①合)資格を取得され、内外で活躍しておられます。

生物生産学講座の学部卒業生、修士修了生はいずれもほぼ就職が内定しています。

(田辺 賢二・A昭43年卒)

応用生命科学

最近の本コースのニュースをお知らせします。植物機能学研究室の山内靖雄助手の神戸大学農学部転出に伴い、平成16年10月から、上中弘典氏が同ポストに赴任されました。京都府立大学農学部で博士号を取得後、農業生物資源研究所、米国ノースカロライナ大学で約5年ポストドクターとして過ごされ、植物分子生物学の最先端の研究をされてきました。面倒見の良い、「兄貴」タイプの人柄です。生物化学研究室の山崎良平教授は海外先進教育研究実践支援プログラムによる派遣研究員として、平成17年2

月から平成17年8月までポストン大学医学部、カリフォルニア大学薬学部に留学され、先日（9月）、帰国されました。益々元気な御様子です。微生物工学研究室の北本豊教授は来年（平成18年3月）に退官予定です。月日の経つのは早いものです。

御存知かもしれませんが、少子化による大学間競争に打ち勝つために、鳥取大学農学部は大きな組織改変がなされ、平成17年度から応用生命科学コースという名称は無くなり、植物菌類資源科学コースに生まれ変わりました。それぞれの教員は同コース、他コースあるいは他学科の新天地で頑張っていくと意気盛んですので、同窓会の皆さん、御心配なく。

ここ最近、卒業生の就職状況が悪かったのですが、今年度の4年生は比較的順調に就職できているようです。OBの皆さんが後輩に就職情報を知らせて頂いていることもこの一助になっており、この場で御礼申し上げますと共に今後ともよろしく申し上げます。

（植物生理学・田中 浄）

生産環境化学

同窓の皆さまにはお元気でご活躍のこととお慶び申し上げます。生産環境化学講座の近況をお伝えいたします。土壌学分野の本名俊正教授は、農学部長に再選され（2期目、本年度から2年間）、国立大学法人に移行後、さまざまなことが激変する状況の中、魅力的な活力溢れる農学部づくりのために日々奮闘されています。応用環境微生物学分野の中島廣光教授は、本年度から副学部長として学部長をサポートされています。お二人とも粉骨砕身の日々です。山田智先生が助教授に、岡真理子先生が講師に昇任されました。岡先生は10月から1年間ドイツへ留学中です。8月から農学部校舎改修工事（東側半分）が始まりました。この工事に伴い生物環境化学分野と生物有機化学分野の研究室の一部が南棟西側の2階へ移転しています。お部屋を訪ねられる際はお気をつけ下さい。さて、恒例のソフトボール大会ですが、昨年秋季最下位の土壌学チームが応用環境微生物学チームを破り春季大会優勝の栄冠を勝ち取りました。現在の教員編成は次のとおりです。土壌学分野（本名俊正教授、山本定博助教授）、植物栄養学分野（真鍋久教授、山田智助教授）、生物環境化学分野（藤山英保教授、岡真理子講師）、応用環境微生物学分野（中島廣光教授、作野えみ助手）。生物有機化

学分野（木村靖教授、河野強助教授）。これまで本講座の教員は、生産環境化学コースの教育を担当してきましたが、平成17年4月の学部改組によって新教育組織ができ上がり、生産環境化学という名称は、旧組織のものとなりました。新しい教育組織では、生産環境化学講座の教員は、生命圏環境化学、国際乾燥地科学、植物菌類資源科学の教育コースを主に担当することになります。

（山本定博・C昭58年卒）

生存環境学

生存環境学講座の近況をご報告いたします。本講座は環境計画学（吉田、原田）、地圏環境保全学（田熊、猪迫）、水利用学（北村、長谷川）、基盤造構学（服部、緒方）、生物生産機械学（岩崎）、生物生産システム工学（唐橋、三竿）の6分野11名の教員で構成されています。大学院修士課程では、これに乾燥地研究センターの乾地自然環境学（神近、木村）、乾地水資源学（安養寺、安田）、乾地土地保全学（山本、井上）の3分野6名の教員が加わります。

法人化して2年目、学長は交代されましたが、岩崎教授は引き続き研究・国際交流担当理事として多忙な日々を送っています。他の教員に異動はなく、教育研究活動に勤しんでいます。

在校生は学部生が2年生35名、3年生34名、4年生32名、大学院生が修士課程1年12名、同2年生17名、博士課程11名、研究生が2名となっています。学部2年生は専門分野の講義が始まる前に現地見学実習を行い、専門知識が現場でどのように役立っているのかを学びました。また、学部3年生はインターンシップで現場そのものを体験してきました。彼らにはこの貴重な体験を今後の勉学に生かして欲しいと思います。4年生は就職活動、卒業論文とかつて経験したことのないプレッシャーの中で学生生活最後の一年間を過ごしています。大学院生、研究生もそれぞれの目標に向かって研究に勉強に鋭意努力しているところです。

最後に、当講座はJABEE（日本技術者教育認定制度）の認定を受けるべく、鋭意準備を行っています。同窓生の皆様にもご協力をお願いすることもありますのでよろしくお願い致します。

（水土生態系管理学・猪迫耕二）

森林科学

森林科学講座も“旧”という名称で呼ぶことになりました。農学部改組によって平成17年度から講座は生物環境科学講座と国際環境科学講座の2つに集約され、旧の森林科学講座は国際環境科学講座の中に組み込まれました。また、従来から森林科学講座と密接な関係にあった附属演習林も改組によって農場と統合され、フィールドサイエンスセンターとして発足しました。組織は劇的に変化しましたが、新組織の下で動いている学生は1年生だけで、2年生以上と修士の学生は旧組織の下で動いていますので、いまだ旧森林科学講座が生きていて2本立て構造となっています。旧森林科学講座の最近の情勢としては、平成16年度末に作野友康教授が定年退職され、また川田俊成助教授が京都府大に転出されましたが、両氏の後任は不補充で、林産科学分野は今の所教員不在です。15年度末に停年退職された藤井禎雄教授の後任も不補充で空席です。旧森林科学講座教授の現員は、山本福壽、黒川泰亨、古川郁夫、八木俊彦、奥村武信、長澤良太の6名です。助教授が市原恒一、本田尚正の2名です(日置佳之助教授はフィールドサイエンスセンターに転出)。講師は井上昭夫1名で助手は無く合計9名の構成です。法人化とともに大学運営に市場原理が持ち込まれ、研究環境は厳しくなる一方ですが、少ない教員で森林科学講座の伝統を守り、森林研究の灯を消さないよう日夜鋭意努力を続けています。先輩・同輩・後輩諸氏の益々のお力添えをお願いする次第です。

(森林計画学・黒川泰亨)

農業経営情報科学

農業経営情報科学講座の教員は、これまで食料経済学コースの学生を中心に教育してきましたが、平成17年度入学生より、従来の教育内容を大きく改めて、新にフードシステム科学コースの教育を担うことになりました。フードシステム科学コースでは、“安全・安心な食品を生産の現場から食卓まで”をキャッチフレーズとして、食品消費という消費者サイドの問題にまで範囲を広げて、経済学を中心とした社会科学的立場から食料の生産、食品の流通・販売、消費に関わる問題を教育していきます。したがって、カリキュラムには、「消費者行動学」、「食品安全論」、「食品産業論」、等といった食料経済学コースではみられなかった科目も設定しています。

また、今年度より教員の1人1分野制がスタート

し、各教員はそれぞれ以下に掲げた特色ある教育研究分野を担っていくことになりました。

笠原浩三先生：食料流通学

佐藤俊夫先生：ファームシステム学

小林 一先生：農業経営学

伊東正一先生：国際食料資源情報経済学

古塚秀夫先生：会計・経営システム学

大津 亨先生：食・農・環境の法社会学

万 里先生：流通情報解析学

松田敏信先生：消費者行動科学

松村一善先生：農業経営管理學

能美 誠 : 食環境経済分析学

なお、今年3月をもちましてアグリビジネス経済学分野教授の中山精一先生が定年でご退官になりました。定年後も鳥取にご在住で、4月以降も名誉教授ボランティアとして、「アグリビジネス経済学」と「同演習」をご担当いただいています。

ところで、今年8月より農学部本館の改修工事が始まった関係で、講座教員ならびに食料経済学コース関係の学生・院生は、従来の居室から離れて、農学部内の別の場所に仮住まいをしています(来年3月まで)。不便な状況ではありますが、教員、学生・院生とも元気でやっています。卒業生の皆さんも、どうぞお元気で活躍ください。ご健闘とご健勝を祈念致します。

(能美 誠・B昭55年卒)

獣医学科

獣医学科の近況についてご報告いたします。

昨今、話題となっております高病原性鳥インフルエンザ問題につきましては、国内防疫体制を整えるために中心的な役割を果たす目的で、鳥由来人獣共通感染症疫学研究センターが本年度4月に農学部創設され、初代センター長には獣医微生物学の大槻公一教授が就任されました。また、センター専任教員として小野悦郎教授ならびに新矢恭子助教授が着任されております。

学科内におきましては、本年3月末に獣医生理学の原田悦守教授が定年退職され後任として澁谷 泉教授が4月1日付で着任されました。また、獣医生理学の七條喜一郎助教授も本年3月でご退職され、現在はモロコの養殖技術を鳥取県内各地に普及される事業に取り組んでおられます。実験動物学の太田康彦教授は平成17年度も引き続いて学科長を努めておられ、多忙な日々を過ごしておられます。獣医内科学教室の佐藤耕太講師は本年3月にテキサス大学

留学から帰国され、診療ならびに研究に頑張っておられます。ところで、鳥取大学におきましては自助努力による獣医学教育の充実を目指すこととなっておりますことは昨年の会報でお伝えいたしました、それに伴い新教育研究分野が創設されております。昨年10月獣医繁殖学に菱沼貢教授が就任され、本年4月、獣医生化学に山野好章教授、獣医感染症学に實方 剛助教授、獣医臨床検査学に竹内 崇助教授がそれぞれ就任しております。さらに、6月には獣医神経病・腫瘍学に辻野久美子講師が就任されました。今後もさらに新しい教育研究分野の新設が予定されており、獣医学教育の充実に貢献できるよう、教員一丸となって努力してまいりたいと考えております。

最後になりましたが、同窓会各位の益々のご健勝を心よりお祈りいたしております。

（竹内 崇・V昭61年卒）

附属フィールドサイエンスセンター

フィールドサイエンスセンター（F S C）は、農地や森林などのフィールドを活用した研究、教育、地域貢献を实践すること、さらに農学部における総合的なフィールド科学の情報発信基地としての機能を担うことを目的として平成17年4月1日附属農場と附属演習林を統合し、新たに普及企画部門を加えて創設されました。F S Cは普及企画部門、生物生産部門、森林部門の3部門からなり、普及企画部門は生産システム工学の唐橋需教授、生物生産部門は栽培技術学の中田昇（A昭49年卒）と園芸生産学の田村文男教授（A昭57年卒）、森林部門は森林生態系管理学の佐野淳之助教授、生態工学の日置佳之助教授がそれぞれ担当し、中田がセンター長を務めています。普及企画部門は、地域の要請を基にした総合的なフィールド教育と全学対象の自然、食農、農林技術に関する実践プログラムの企画と運営を担当します。生物生産部門は農場を場として農業生産の基礎となる技術・技能教育を分担すると共に地域特産物の生産に関する技術・品種の開発を通じた高度な技術教育・研究を行います。森林部門は大学の森（旧演習林）を中心に森林生態系を健全な状態に維持し、さまざまなフィールドでの野外教育・森林の生態や保全に関する研究、子供や市民を対象とした森林教育などを通じた地域貢献を行います。

現在、唐橋先生には生存環境学コース、田村先生、中田には生物生産学コース、佐野先生、日置先生には森林科学コースの学生がそれぞれ卒論指導を受け

ています。来学の際には新たなF S Cにもお立ち寄りください。

（中田 昇・A昭49年卒）

附属菌類きのご遺伝資源研究センター

菌類きのご遺伝資源研究センターは本年4月1日に農学部の附属施設として設立されました。本センターは、尾谷浩教授（A昭45年卒）をセンター長（兼務）とし、菌類きのご環境生態学研究部門は中島廣光教授（兼務）と会見忠則助教授（兼務）、そして菌類きのご機能開発研究部門は松本晃幸客員教授（C昭52年卒）と霜村典宏客員助教授（A昭62年卒）、合計3部門7名で構成されています。このうち、菌類きのご機能開発研究部門は鳥取県からの寄付部門であり、鳥取県における産業の活性化や新産業の創出を目指しています。なお、前川、松本、霜村の3教員は、センター設立に伴い、(財)日本きのごセンター菌茸研究所より着任しました。

本センターでは、自然生態系の維持、植物の成長促進やストレス耐性の付与、環境汚染物質の浄化など多様な機能を持つ菌類きのごに関し、3部門が連携協力して、高レベルで特色ある体系的な教育と研究にスタッフ一丸となって取り組んでいきたいと考えています。また、網羅的な菌類きのご研究を行う研究機関は国内の他大学にはなく、将来的にはアジア、さらに世界の拠点形成を本センターは目指しています。しかし、まだ設立されたばかりであり、研究教育体制、研究設備等を整備するには数年かかると思います。どうか同窓会の皆様のご理解とご支援を賜りたく存じます。

（前川二郎・A昭53年卒）

附属動物病院

附属動物病院は獣医師養成の教育病院、社会で活躍する獣医師の卒後教育および地域社会への高度医療サービス施設としての役割を担っております。診療は臨床獣医学分野の教員が担当しております。現在の臨床学分野の教員は、内科学-日笠喜朗教授、佐藤耕太講師、外科学-南三郎教授、岡村泰彦助手、神経病・腫瘍学-岡本芳晴教授、辻野久美子講師、獣医繁殖学-菱沼貢教授、臨床検査学-竹内崇助教授の計8名であります。獣医繁殖学は昨年度に新設され、菱沼先生が畜産学の助教授から獣医繁殖学の教授に昇任異動されました。獣医臨床検査学は本年度より新設され、竹内先生が生理学助手から臨床検査学の助教授に昇任異動されました。辻野先生は本年

度6月に内科学助手から神経病・腫瘍学の講師に昇任異動されました。以上の臨床教員スタッフが診療を担当していますが、内科系診療は日笠、佐藤、竹内、辻野の4名、外科系診療は南、岡本、菱沼、岡村の4名が担当しています。また、本年度4月より、鳥取県農業共済連合会を定年退職された赤木敬輔先生が附属動物病院における産業動物診療専任の獣医師(特任教授)として着任され、主に牛の往診診療に従事しています。さらに、本年度より動物看護師として松本静香さんと鷲尾藍さんの2名が着任し、動物の看護業務を行なっております。以上のようなスタッフで動物病院の診療活動を行なっており、動物病院も少しずつではありますが、充実してきています。今後の新たな臨床分野として獣医画像診断学、獣医薬物治療学が予定されています。大学附属動物病院には他の獣医師への情報提供の義務および他の獣医師からの診療施設紹介としての使命があります。そのため、動物病院としましては、専門診療獣医師を充実させ、高度医療をさらに進展させていきたいと考えています。さらに、地域開業獣医師との連携と高度な診療情報提供サービスを推進させ、本学部の地域社会に対する貢献を一層増加させていきたいと思っています。そのためには同窓生の皆様方の御支援が是非とも必要であります。今後とも同窓生の皆様方のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

(動物病院長・日笠 喜朗)

附属鳥由来人獣共通感染症疫学研究センター

平成17年4月をもって表記研究センターが農学部に設立されました。設立にあたっては、文部科学省研究振興局学術機関課およびライフサイエンス課のなみなみならぬ配慮をいただきました。

最近、BSE、SARS、高病原性鳥インフルエンザなど従来ほとんど関心が持たれていなかった人獣共通感染症、すなわち動物から人へ感染してくる感染症が出現しています。大きな社会問題になっていますし、国内のみならず国際的にも大きな問題をひき起こしています。

この研究センターは鳥類から人に感染する感染症に的を絞って、その対策を確立することを目的として設立されたのです。鳥インフルエンザについては、国内外での出現予測、病原体の生態、病原性、遺伝子解析等を行い、新たな流行防止対策の確立にも力を入れます。

本研究センターは3部門から構成されています。

新設の病態学研究部門には小野悦郎教授、新矢恭子助教授が赴任されました。主として病原体の国内侵入経路の推定研究に従事します。残りの2部門は兼任で、疾病管理学研究部門(大槻公一教授、村瀬敏之助教授)、分子疫学研究部門(伊藤壽啓教授、伊藤啓史助教授)で、主として病原体の出現予測、監視体制の確立を旨とする研究に取り組んでいます。国外との共同研究も、韓国、ベトナム等と開始しています。ご支援ください。

(センター長・大槻公一)

乾燥地研究センター

早くも1年が経ちましたが、同窓会会員の皆様にはお変わりなくご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。この1年、センター陣容の動きを紹介しますと、平成16年10月、センター初の人文科学系研究者として縄田浩志講師(砂漠化対処部門:人間・環境学)が着任しました。17年3月には、稲永 忍教授(生理生態分野)がJIRCASの理事長に転出、濱村邦夫教授(植物生産分野)が定年により退官されました。また17年4月には恒川篤史教授(植物生産分野)が着任しました。

乾地研は、平成2年の改組以来15年が経過しました。「乾燥地の砂漠化防止と修復を行い、持続的な開発を行う」という研究目標ならびに国内・外の研究機関とネットワークを組み、乾燥地研究に関する国際的な研究拠点を形成するという設置目標を遂行するために、いろいろと試行錯誤を行っています。21世紀COEは、その試みの一つとして、「乾燥地に住む人々の健康的な生活を保障する乾燥地科学」を目指しています。農学部に加えて、医学部・工学部との連携、将来は自然科学だけでなく地域学部の社会科学分野を視野に入れた全学的な連携研究を図り、その中で国際的に活躍できる若手研究者・技術者の育成、ならびに海外フィールドにおける調査研究を通じて国際的な研究交流のネットワークを構築しようとしています。

乾燥地科学の目指すところは、最終的には人の生存につながり、食料、農業生産に帰結するものです。農学部から派生した乾燥地研究センターが鳥取大学のひとつのインターフェイスとなって、研究ネットワークを構築し、法人化後の鳥取大学の新しい息吹となれるよう努力していますので、どうぞ、お見守りいただきたいと思ひます。

では、また次の機会まで、皆様のご健康とご清栄をお祈りいたしております。

(センター長・神近 牧男)

支部だより

関東支部



植田 昌明（E昭33年卒）

平成17年度の現状：関東支部の構成・会員数などの概要は同窓会報26号にあります。概要は同じですので省略します。本年度の総会は10月22日（土）に法曹会館で開きました。次年度（平成18年度）の開催期日は、この総会で決まるため未定です。さまざまな活動のうち、やはり最大課題は正確な名簿作成です。これらも含めた全体対応のため正副会長会（会長・爲季 繁・A昭38年卒）を年2回開きました。

JICA（国際協力機構）、つくば、同窓会員の活動と大学との関係：報告を視座に少し変えます。見出しのように会員活動と鳥取大学との関係です。このため卒業生が多くいるJICA、つくばを選びます。JICAでは2005年9月現在、約50カ国からの海外各国からの研修員が集まります。研修は稲作、野菜、農業機械、灌漑・排水の4分野になります。それぞれの分野に関係している指導員（者）は次のとおりです。

・卒業生の活動：阿部 靖志氏（N平4年卒）；指導分野は灌漑・排水です。チリ（海外青年協力隊）、JICE（国際協力センター）などを経て、現在の所属は緑資源機構です。水文、気象や畑地灌漑に特に強い博士です。

小山 真一氏（N平3年卒）；指導分野は野菜栽培です。ミクロネシア連邦（協力隊）、フィリピン、JICA専門家（研修指導員）などを経て、最近ではスリランカの野菜採種コースの指導を行なっています。

植田 昌明（E昭33年卒・副会長）：インドネシアJICA派遣専門家、農水省（農業工学研究所）職員を経て、灌漑・排水分野の研修指導員をしています。博士に加えて技術士、技術事項の通訳などで企画、講義から解説・現地案内まで多角的に対応しています。

・つくばの灌漑・排水分野の関係者は次の分野の対応をしています。：1）中国の水問題、特に節水と水管理。2）中央アジア（ウズベキスタン、キルギスタン、アゼルバイジャンなど）の水管理。3）南アフリカ・アフリカの農業・農村開発 4）バングラ・スリランカ、ベトナムなどのカウンターパート

の研修。5）行政管を対象にした水資源の持続開発対応やイランの農業の農地基盤の整備があります。

・上記1）から5）の課題は全国の大学との関係で対応しています：このうち世界の農業を論じるに際して鳥取大学の参加・協力は必須です。具体的・結果的には次の分野の先生を招いています。

・鳥取大学からのJICAに講義をお願いしている先生：安養寺久男（乾燥地研究センター、乾燥地農業など）、北村義信（生存環境学、水利学など）、山本 太平（乾燥地研究センター、乾燥地農業など）

いずれも教授。敬称及び専門事項は周知のため省略します。

島根県支部

横田 司（V昭60年卒）

平成16年11月27日（土）に平成16・17年度の鳥取大学農学部同窓会島根県支部同窓会が会員40名の参加のもとに、松江市の「サンラポーむらくも」にお



始めに前回の総会以降に亡くなられた会員の御冥福を祈って黙祷を行いました。その後県外に転出された名原会長の代理として野津副会長からあいさつがありました。次に同窓会本部から出席いただいた中田昇先生からのごあいさつがあり、独立行政法人大学としての再編問題や大学同窓会等についてお話がありました。

引き続き、議長に野津副会長を選出して議事に移りました。まず、事務局から平成14～15年度の事業報告、決算報告、そして秋庭監事からの監査報告があった後、平成16～17年度の事業計画、予算案が示されましたが、いずれも原案どおり承認されました。

その後、役員改選が行われ、会長に吉野蕃人氏（A昭20年卒）、副会長に勝部治郎氏（V昭25年卒）、野津衛氏（F昭28年卒）を選出しました。

記念写真撮影の後懇親会に入り、吉野新会長のあいさつ、乾杯の音頭でにぎやかに始まりました。懇親会では限られた時間でしたが、出席された方々の

紹介や情報交換が活発に行われ、会員の方々が農業関係はもとより、多方面で活躍しておられる様子がかがえました。

そして、最後に、勝部新副会長の万歳三唱で懇親会はお開きとなりました。

今後も、この同窓会での出会いや、つながりを大切にしていきたいものです。

山 口 県 支 部

支部長 藤岡 正美 (A昭45年卒)

残暑厳しく、衆議院議員選挙運動期間中の慌ただししい9月3日(土)午後4時から、新山口駅前(小郡町)の山口グランドホテルにて、山口県支部総会が会員41名、来賓として鳥取大学農学部の能美誠教授が出席して開催された。

この度の総会は、重村正憲(B昭42年卒)会長、内田征夫(F昭42年卒)副会長の退任に伴って開催されたもので、新たに藤岡正美(A昭45年卒)会長、中野正夫(C昭45年卒)副会長を選出するとともに、事務局体制について協議した後、情報交換を行い、親睦を深めた。



総会では重村会長が退任の挨拶と開催の趣旨を述べ、能美教授から「鳥取大学農学部の学科編成と教育内容、附属・研究施設等」についての報告を頂いた。その後、記念写真を撮り、粟屋芳信(A昭24年卒)元会長が乾杯の音頭をとり、宴会に入った。宴が佳境に入ったところで、粟屋元会長指揮のもと全員による「鳥取高等農林専門学校校歌」(大海原の水受けて...)と「啓成寮寮歌」(千古尽きせぬ海の音...)の大合唱を行った。校歌を2番から歌ったため合唱のあとで、金子直祐(C昭16年卒)先輩が校歌の歌詞は1番が国民としての気概、2番が学生としての修養・研究の気概、3番が農に生きるものとしての矜持を謳ったものであるとの説明が行われ、「ほうー、そうなのか」とその意味を初めて知り、出席者全員が感服、改めて1番を合唱した。その後、

粟屋元会長による恒例の、ネクタイ鉢巻き姿での応援、三三七拍子に合わせて拍手が鳴り響いた。宴の中締めは田村茂照(E昭26年卒)元県議が、自分の生き甲斐としてきた仕事との関連で万歳三唱は馴染めないで、「団結頑張ろう」を三唱したいとして、これまた同窓会の中締めでは初めて、「鳥取高農・鳥取大学同窓会」【団結頑張ろう】を三唱して閉会した。

次年度以降の総会についても、できうる限り会員の方の参加しやすい日程とし、会員の青春の日の思いで綴った文集も作成するとよいのではとの意見も頂いており、より充実した同窓会となるようみんなで盛り上げていきたいと考えている。

福 岡 県 支 部

支部長 岡野 昌明 (F昭31年卒)

現在、福岡県支部は175名(農科29、農業工学28、農業経営26、林科22、農芸化学23、総合農学12、科不明5、住所不明約30)内女性21名で全体の住居分布は北九州市中心が6割、福岡市中心が4割です。

今までは年1回の支部会員の総会と懇親交流は殆ど福岡地区で行なって来ました。今回は久しぶりに北九州でやろうとなって北九州で総会を開催しました。

平成16年度の総会は'04年12月4日JR小倉駅内の八仙閣小倉駅店の和室で午後から20名の会員が出席して開かれました。総会では岡野支部長の挨拶に続き、本部の中田昇常任幹事(A昭49年卒附属農場長・教授)から母校の独立法人化後の具体的な変化の状況や動きをととも解かりやすく挨拶と共に報告していただき教員の苦勞を感じました。小泉行革の先端を切った法人化は国民的議論の不十分なまま進行している郵政民営化と似ていると思います。今回北九州の方が約10数人と圧倒的に多く大分県近くの白川正(F昭39年卒)浪折紀文(E昭39年卒)両氏も元気に参加された。初めての方が10人で啓成寮時代の前後の方が多くて懐かしい話が懇親会を沸き立たせました。松隈俊彦(E昭45年卒)さんは寮最後だったとかで賑わいました。中西俊(C昭35年卒)さんは『旧約聖書』で新説を披露。大友進(C昭53年卒)さんは中学教師で元気いっぱい。長野以真(N平5年卒)中村宏一(F昭63年卒)両氏は県庁の新人ホープとして奮闘。残念だったのは女性参加が0で支部長の段取りが不十分でした。今回は初参加が多く話題も多く話に乗りすぎて、例年の踊りは

人・顔・人・顔



宮本 幸一（E昭45年卒）
独立行政法人 農業工学研究所
理事長

農業土木分野の技術行政マンとして農水省に就職して間もなく、利根川下流域で茨城県西部の3万haの灌漑計画を樹立する現場に配属になった。水田の水不足を解消し、同時に畑地灌漑を導入し近代的な地域営農を確立することが目的である。川には多くの水が流れ、新規に取水できる水は十分有るように見えるが、実際には既に水利権が設定されており、殆ど無いのが実情である。新たな水を求めて、勤務の3年間に地区内を這いずり回るような現地調査と水利用計画の試算を繰り返し、一方では河川管理者である建設省の出先機関とのいわゆる河川協議が続いた。この過程で、地元農家の水への熱い思いに接したり、かつての「水争い」の厳しさを垣間見て、農業の基礎資本である水の確保と時代に応じた水利用の高度化への取り組みの大切さが身にしみた。

農業土木技術分野は幅が広く技術レベルは日進月歩する。私は前記の他に干拓、ダム、堰、パイプライン、開拓などの技術や行政施策業務に携わった。技術行政マンは、多様な技術分野で最適な対応が求められ、それは大学で習わないものが多い。近年は、地域振興、農村・自然

環境保全、地域資源管理など、さらに多様化の一途をたどっている。

このため、仲間内で特定の技術のスペシャリストになるか、浅くても広い技術に対応できるゼネラリストになるべきかよく議論した。限られた人数で対応するには、答えは明らかで後者を選択するしかない。私は、ゼネラリストとして多様な技術を研く中でも、一つ抜きんでて研究者にも匹敵するレベルの「得意分野」を持つべきと考えた。アメリカのロックフェラー財団のモットーであるMaking peaks higher（得意分野を高める）がヒントである。これは研究者の場合であり、技術行政マンである私はGrowing high peaks（高い得意分野をつくる）を目指すのである。就職した頃の経験から、水の確保と利用技術をこれに定めた。いろいろなポジションで多様な仕事をしたが、水に関する技術情報については常にアンテナを広げ、新たな論説には注目し、関係文献は収集に努めてきた。

今から11年前に、研究者として農業工学研究所勤務の打診があった。それまで研究部門とは無縁であったため、大いに戸惑ったが、得意分野としての水の知見を生かし、深化させる機会かと考え研究者になった。母校乾燥地研究センターの山本太平教授の門を叩き、親身のご指導を頂いて湯水時の水利用に関して学位（論文博士）を取得し、この4月には、理事長に指名された。ポジションによって苦勞は違うが、何処にいようと得意分野を通じて社会貢献できることは幸せなことと考えている。

出し遅れ、新旧両校歌の合唱で解散しました。

熊 本 県 支 部

支部長 森尾 由成（A昭53年卒）

熊本県支部の活動は主に総会を開き、その総会に参加される同窓生の情報交換や、お互いの親交を深めるための懇親会を大切にしています。また総会の時に同窓会本部より先生に来ていただいて、大学の現状や鳥取の様子などをお伺いして鳥取との距離を埋めています。

本年度は竹内崇先生にお越しいただきました。会場は熊本城の真下にある展望の見事なホテルで、出

席者は話が弾み時を忘れて懇親を深めました。会の最後には恒例になった鳥取高農校歌と啓成寮寮歌を大合唱して散会しました。これらの歌を知らない同窓生にとっても先人達の志高の意気を感じる瞬間となっています。

また、本年度は総会后に思いもよらぬ衆議院の解散、総選挙がありました。県支部同窓生の松岡利勝氏も立候補し見事当選され、6期目の議員活動をされておられます。当選の挨拶の中で何度も“初心をわすれない”“感謝を忘れない”と繰り返しておられたのが印象的でした。ご活躍を期待します。

最後に全国の同窓の皆様方のご健勝をお祈りして

人・顔・人・顔



秋光 和也 (A昭62年院卒)

香川大学教授

農学部生命機能科学科

植物病理学研究室

湖山池をレガッタで漕ぐと、いつもと違う景色が見えた。栗原昭宏先輩 (V昭59年卒) と私を含むクルー (漕ぎ手) 全員が柔道部の艇に、漕艇部の松岡均 (A昭60年卒) をコックス (舵手) に迎え、学内レガッタでオールを握った。レースピッチで漕ぐことをパドルといい、力を分散させないために、ブレードが水をかく瞬間に「キャッチ!」と声をあわせることを覚えた。賞品のビール獲得も大きな目標であったが、湖山池を流れる風を切る爽快さと、ゴールに向かって全力でキャッチを繰り返すのが無性に楽しかった。コックスのかけ声でパドルを止めると、惰性で艇が水面を滑るように進んだ。ガンネルに肘を掛けて辺りを見ると、目の高さが水面から50センチ程しかいないため、周囲の景色にいつもと違う迫力と立体感を感じた。

学部2年の終了と同時にバックパックを背負い、欧州・米国と歩いた。11ヶ月の放浪後、甲元啓介名誉教授と尾谷浩教授の植物病理学研究室に入門を許された。山本伸吾 (A昭58年院卒)、

渡辺訓任 (A昭58年院卒)、佐瀬政明 (A昭59年院卒)、香口哲行 (A昭59年院卒) 各先輩の存在感は当時から圧倒的であった。病理のメンバーの多くは大学院に進み、原本雅昇 (A昭60年院卒)、塩見寛 (A昭60年院卒) 各先輩、田辺憲太郎 (A昭61年院卒)、三谷滋 (A昭61年院卒)、秋山茂信 (A昭61年院卒)、櫻井禎 (A昭62年院卒)、田平弘基 (A昭62年院卒) とは今でも同じ研究分野で切磋琢磨する間柄である。

振返れば、あの頃から植物病理学という湖でオールを握りパドルを繰り返しているように思える。放浪中に米国の大学院に興味をもち、南北494km・東西190kmのミシガン湖に近い、ミシガン州立大学を留学先に選んだ。児玉基一朗助教授が研究室に來られて間もなく旅立ち、学位を頂き、ポストドック研究員として勤め、気がつくと7年弱の年月が流れ、長男は2歳になっていた。

ご縁があり香川大学に赴任した時、瀬戸内海はミシガン湖よりも波が低いことにまず驚いた。相変わらず植物病理学という湖で艇を疾走させているが、クルーとしては引退させられ、変わりに若い学生諸氏をクルーとした新しい艇のコックスをつとめている。あの頃クルーとして見た辺りの景色とはまた違った景色が見え始めたが、湖面を流れる風を切る爽快さと、ゴールに向かって全力でキャッチを繰り返す楽しさは今も昔も変わらない。

熊本県支部の報告を終えさせていただきます。

沖縄県支部

下地 秀作 (V平6年卒)

平成17年6月25日、那覇市で沖縄県支部総会が盛大に開催されました。農学部同窓会と銘打っていますが、沖縄のユイマール精神 (お互いの助け合いやつながりを大切にすること) にのっとり、教育学部や工学部の面々も参加しています。当日は会員26名のうち池田支部長をはじめ出席10名と、若干ごんまりとした会となりましたが、今回は若い会員 (とは言っても30代) が約半分近く参加しており、人数以上の盛り上がりでした。会員の近況報告や、学生

時代の思い出話等それぞれに楽しい一時を過ごしました。

その勢いで二次会に流れましたが、たまには違う趣向でという司会の意向を汲み、ヒージャー (山羊) 料理店に行くこととなりました。いつものきれいなお姉さんのところも捨てがたいのにと、後ろ髪を引かれる思いでしたが…。店は観光客に有名な店で大盛況でしたが、なんとか席を確保し、山羊の刺身など数々の珍品料理を堪能し、飲みすぎることもなく無事に終了しました。

今回は、大学側から出席が無く、鳥取の近況が聞こえず、少々寂しくもありましたが、来年の沖縄県支部総会には是非ご参加くださいますよう会員一同心よりお待ちしております。

同窓会名簿の作成・発刊に関するアンケート調査のお願い

現在、農学部同窓会では「同窓会のあり方検討委員会」を中心として、平成10年以来発刊していない『農学部同窓会名簿』の作成・発刊に関する検討を行なっておりますが、名簿の作成・発刊に関しましてはいろいろなご意見があるかと思ひます。

そこで、今回、同窓会員の皆様から幅広く名簿の作成・発刊に関してご意見を伺うことにさせていただきました。ご多用の時期に大変恐縮ですが、同封の葉書にあります調査項目にご回答のうえ、ポストに投函していただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

事務局だより

- 私のアンニョン -

会員の皆様には元気でご活躍のことと存じます。現在、農学部改築工事中のため、毎日削岩機の音をバックミュージックにリズムカルに？仕事をしております。

ずいぶん長い間同窓会の仕事をさせていただいたお蔭で本当にたくさんの方々との出会いをいただくことが出来ました。今、日本は韓流ブームに沸き返っておりますが、私はその例に漏れ（ハマっている方々には大変申し訳ないのですが...）何をいまさらと醒めた感で眺めております。そもそも私の韓流は20年以上も前に始まり、もちろん訪韓も一度や二度ではありません。その原点は同窓の関（ミン）先生です。獣医学科昭和20年ご卒業の先生はハンリン大学医学部教授を退官され現在ソウルにお住まいです。先生の学生時代の下宿先が今私の住んでいる町だったということも手伝い、親しくさせていただいており、はるか昔？初めて先生とお会いした時、‘アガシ’（お嬢さん）と呼ばれ、ほくそ笑んでいた私も今では完璧な？‘アジュマ’（おばさん）に成長し、時の流れを感じずにはおれません。昨年も韓国へ誘っていただいたのですが、時はまさしく韓流フィーバー真っ最中。日本人観光客の多さに思わず引いてしまった次第、とは冗談ですが...。延び延びになっていましたが、やっと訪韓叶い久しぶりに先生にお会いすることが出来ました。ご高齢にもかかわらずいつもシャキッと先頭を歩かれる姿は相変わらずでビックリ、ホッと安心。

今回も盛りだくさん案内をしていただいた中、是非、皆様にご紹介させていただきたいと思ったのがソウル市の重要文化財“北村（ポクチョン）”です。ソウルの街中にありながら、韓国の伝統と精神が伝わる文化遺産です。朝鮮王朝時代から風水的にもよい場所であるというプライドを保ち続けてきた由緒ある場所でもあります。まず、北村文化センターで案内図をゲット。私の顔を見てすぐ、若い学芸員のお兄さんが持ってきて下さったのが“冬のソナタ撮影地のパンフレット”なんでもドラマに出てくる高校はこの北村地域にあるとか...。感激も薄くきょとんとした顔の私にとっても不満そうでしたが、気を取り直し？文化センターの見学。学芸員さんの説明をミン先生が通訳。ところが、途中、“ここは です”の学芸員さんの説明に“いや、違う！！”と先生。怪訝そうな顔の学芸員さんに先生の強烈な一言。“だって、ここは僕の生家だから...。”まるで葵のご紋の印籠をみせられたように呆然の学芸員さん。パ

ンフレットによるとこの文化センターは朝鮮末期に権勢を誇った‘ミン財務官宅’の敷地に建てられたとある。いままでのリラックスモードは一変し、緊張した面持ちで先生に付きっきりで説明を聞いていた？？学芸員さんでした。ミン一族はお妃を輩出した家系（某教授によれば、韓国ドラマにミンという苗字は出てこないそうだが、唯一NHK？の宮廷ドラマにミンという妃の名が出てきたとか。）だとは聞いていましたが、まさか先生の生家が重要文化財とは...。皆さん、是非一度“北村”へ！！

韓国の方はこの季節、サムゲタン（参鶏湯）を食べて夏を乗り切るとか。今までに何度かいただいたことはありますが、知る人ぞ知るそのお店は“うこっけいのサムゲタン”すこぶるいい匂いと湯気の中から現れたその姿。オーッ！！今の今までうこっけいの骨が黒いとは露程も知らず...。一口、二口と進むうちにカラス？こうもり？を食しているような感じが頭の中を駆け巡り、健闘むなくし完食出来ず。“チョンマル、ミアナムダ”本当にごめんなさい。

昼食後、久々の景福宮散策。少し額に汗しながら、時折、木立を抜けさわさわと吹いてくる心地よい初夏の風に心も軽く。旅に出る前には必ずブルーになる私ですが、“来てみれば 都なりけり よそながら”いつも雑音に右往左往しているお疲れモードの心が少しずつ解放されるような気がしてきて不思議です。旅で見つけた他愛もない喜びや発見が、日々の痛みや歪みを埋めてくれるのでしょうか。

学生時代の話、歴史のこと、今度こそ先生にたくさん聞いておなくては！といつも思っているのですが、“先生、この間の美味しいキムチはどこのお店でしたっけ？”などという話に終始してしまい...。自己中心的で自分の理解したいようにしか他人を理解しない人が増えている昨今、先生の超ハイレベルな人間性に接するたびに改めて本物の優しさや思いやりについて考えさせられます。いろいろな辛酸も時が経てばほんのわずか？先生の歴史の中には心の熱さをなだめながら、情熱を心の小箱に隠さなくてははいけなことも多々あったのでは...。本物の優しさや思いやりこそが自らをも他者をも説得できるのではないのでしょうか。

なかなか先生のようにはいきませんが、関節の力を程よく抜いて、さらりと頑張れたらと思っています。来年もまた先生にお会い出来るのを楽しみに。

同窓会 北嶋邦恵